

2020年8月に実施された噴火湾沿岸の環境調査結果のうち、森（8/3, 8/24）、八雲（8/17）、静狩（8/18）、虻田（8/4, 8/25）、伊達（8/17）の水温・塩分の観測結果をとりまとめました。（本情報は函館水産試験場のHPからもご覧頂けます）

## 【水温・塩分の鉛直分布】

調査地点・調査日により、バラツキは見られますが、8月上・中旬の調査では概ね深度10m以浅に河川水の影響を受けた夏季噴火湾表層水（塩分32以下）が見られます（図1）。8/1の調査船調査で湾外50m以深には津軽暖流水（水温6℃以上、塩分33.6以上）が分布していることが確認されていますが（噴火湾環境情報No.5参照）、8月の沿岸域の調査では湾内への流入は見られません。

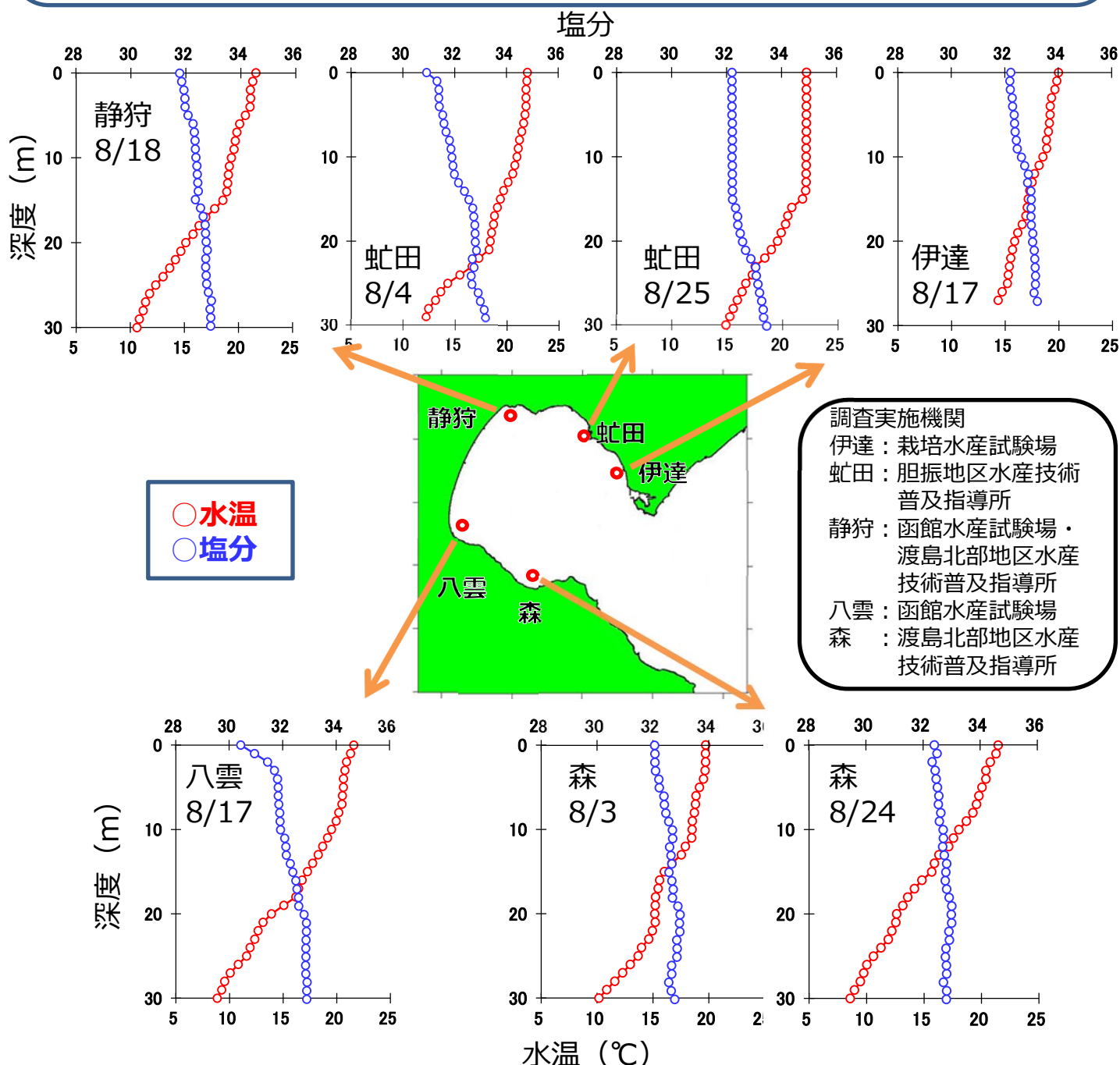


図1 噴火湾沿岸の水温・塩分の鉛直分布

※本調査の一部および情報配信は北海道ほたて漁業振興協会からの委託研究により実施しています。

【ホタテガイ養殖関係者向け】

【養殖ホタテガイの「稚貝のでき」と夏季の環境条件について】

「稚貝のできが良かった年」、「稚貝のできが悪かった年」および2020年の水温鉛直分布を比較しました（図2）。稚貝のできが悪かった年は8月後半の深度による水温差が小さく、成層が弱い条件になっています（赤矢印）。この時期の「成層の弱さ」が「稚貝のでき」とどのような因果関係にあるのかは、よく分かっていませんが、少なくとも2020年は「稚貝のできが良かった年」と似た特徴を示しています。一方、7月前半～8月前半にかけて深度10m以深の水温が非常に高く推移し、7月の10m深および15m深の平均水温は、月2回以上調査を行っている虻田（1998年～）および森地区（2002年～）で過去最高値を記録しました。従って、この時期の噴火湾の稚貝が野外で経験する環境としては非常に稀な水温であり、稚貝の成育良否を検討する上で不確定な要素と言えます。今後もできるだけ稚貝にストレスを与えない作業・管理を心がけてください。

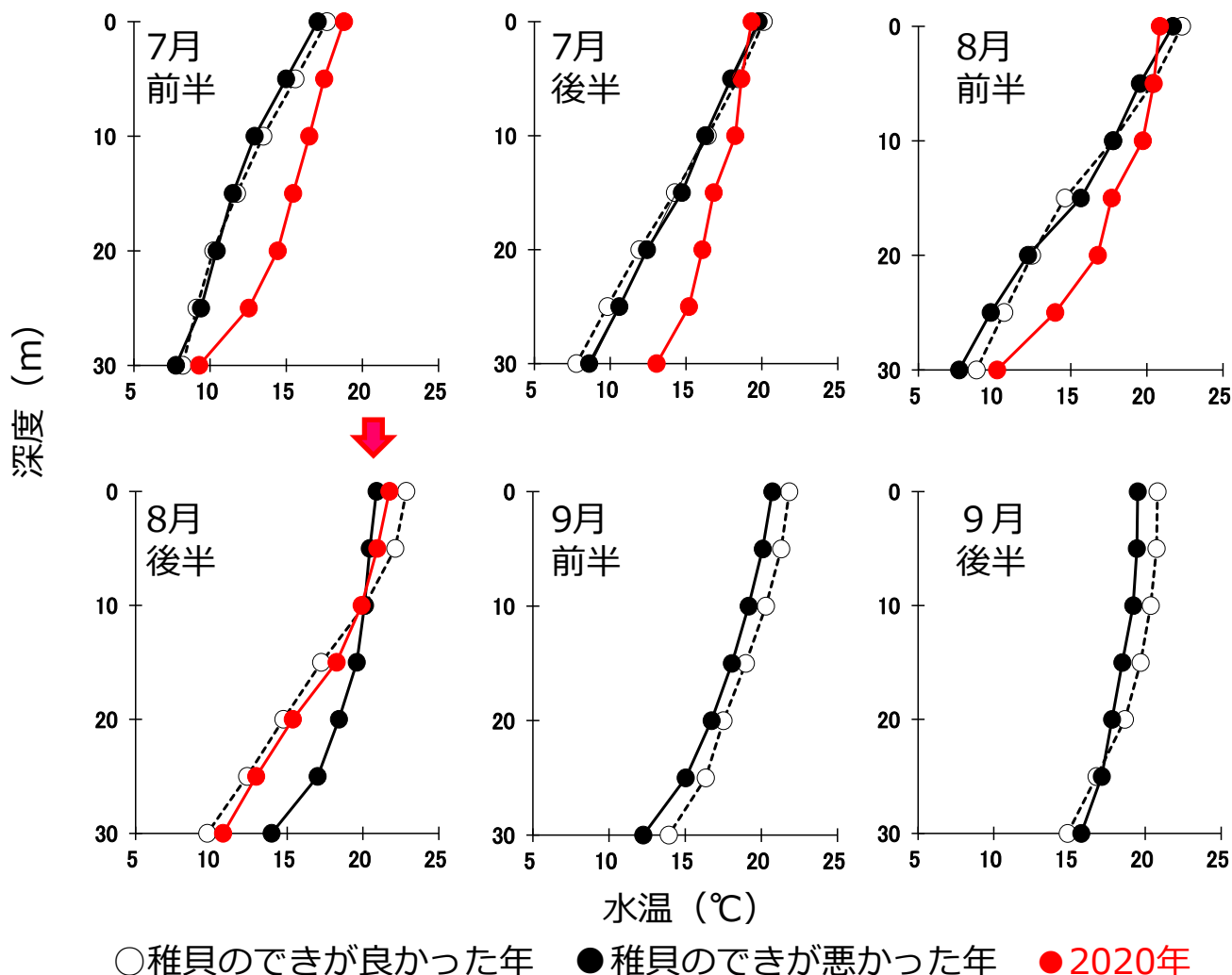


図2 噴火湾沿岸の夏季の水温鉛直分布  
2010年～2020年，虻田，八雲、森地区の1～2回/月の観測結果を各年各月の前後半の深度別に集計した。「稚貝のできが良かった年」および「稚貝のできが悪かった年」の定義については、噴火湾環境情報No.4を参照ください。